

---

# 子猫の導くままに

朧月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

子猫の導くままに

### 【Zコード】

Z6430E

### 【作者名】

朧月

### 【あらすじ】

ある日の小学校の帰り道。哀とコナンの道端ストーリー（笑）一人考え事をしていた哀は、自分を卑下してコナンと衝突してしまう。そんな一コマの、ほのぼのシリアスストーリー。（ちなみに、私の中で最もお初小説の疑いが高い、かなり古い一作です／＼／＼今になつて、加筆修正のみ出して出した、恥さらし作品vv）

(前書き)

□ 哀です。私的には原作通りの哀ちゃんの片思いですが、新  
蘭OR△蘭しか受け付けない方は「」注意下さい。

思えば、こうして子供生活をし始めてからかなり経つのに。

工藤君、あなたと出会ってから、一体どれ位経つのかしら？ こうして、あなたの横顔を盗み見るのも、大分茶飯事になつたわ。あなたは知らないでしょうね。最初は凄く恨んでた。お姉ちゃんを、助けられた筈のあなたを……。新聞に写っていた、あの無力な姿のあなたが、実際とはあまりにも違いすぎたから。

「あん？ なに人の顔じろじろ見てんだよ？」

「……別に」

半眼で振り向いた工藤君に、私はそつけない答えを返した。

私達がどうして二人きりで居るかって？ ついさっきチャイムが鳴った帝丹小学校から帰る途中なの。皆とは少し前の道で別れて、彼とももうすぐ別れる事になるわ。

そう。この道も、景色も、随分通いなれたものね。

普段どおりの帰り道に、丁度工藤君が角を曲がった時だったわね。

「あ！」

横を見た江戸川君が、何かに気付いたような声をあげた。突然声を出すなら、もう少し声のボリュームを落として欲しいものね。反動で心臓がうるさいじゃない。

文句の一つも言つてあげるつもりで口を開きかけたけど、彼は壁に向かって突然しゃがみ込んだ。楽しそうな後姿……通行人が不審がってるわよ？

「何やつてるのよ?」

「へ? いいから、お前も見てみるよ」

ちょっと呆れながら尋ねた問いただつたけど、返つて来たのは弾んだ声だったわ。こっちを振り向きもしないで手招きだけしてくるなんて、よっぽど興味深いものがあるんでしょうね?

「だから、何……?」

面倒くさいけど、仕方なしに一藤君の肩と壁にある隙間を覗き込んでみる。

「あ……」

驚き……違うわね、これは素直に”可愛い”と形容した方がふさわしいかも知れないわ。小さくて、雪のように真っ白な子達が、五匹……いえ、この親を混ぜると六匹ね。

つい見惚れていた私に、隣で一藤君が悪戯っぽく笑つた。少しだけ不機嫌に映るような視線を送つてみたけど……ダメ、顔を戻すとまた、自然に筋肉が綻んできてしまうわ。

“ミヤア”

五匹居る子猫の中の一匹から、小さくてかわいい声があがる。母猫が、その子の顔をぺろぺろ舐めている。そんな姿を見ると、私も純粋に癒されるわ。

「あ、一匹行つたぞ、灰原」

さつき鳴いた子猫とはまた別の一匹が、どういうわけか私の足にすりよつてきてる。とくん、と胸が高鳴る音が聞こえる。野良の笛なのに、随分懐っこいのね。

しゃがんで、子猫の頭を撫でてあげて、「ひー、自然と口元が綻んでいつたわ。さっきまでのどす黒い感情なんて、消し去つてくれるみたい。

フツと息をつく音が耳に届いた。隣を見ると、江戸川君が私を見て微笑ついている。見透かしたような目が、少ししゃべに障る笑みではあるけどね。

「可愛いだろ？ 実は昨日見た時はまだ生まれてなかつたんだ。母猫の腹が大きい状態でな。今朝はもう居たみてーだけど、まだ生まれて間もない仔猫だぞ」

明るい口調で彼は言つたけど、私の世界は少しだけ曇つたわ。生まれて間もない仔猫つて言葉の何かが、私の心にある闇をつづいた気がしたのよ。

そうね、わかっているわ。この子は、生まれたばかりのまっさらな存在よ。見た目も心も、こんなに真っ白な子猫……そこに、私みたいなのがれた存在<sup>くわうね</sup>が近づいてしまつてよかつたのかしら？

私が犯した罪の重さ位、判つてるわ。江戸川君……あなただけ、その被害を受けた一人なのに。そんなあなたを、ずっと恨んでいたのよ。

だから、目の前であなたが屈託なく笑う程、責められている気がする。

しばらく俯いていたけど、彼は突然私の前にしゃがみ込んだ。

「……どうした？」

「どうもしないわ。通りがかる人が構いすぎたのかしら。警戒心がまるでないわね、この子達」

彼の心配そうな問いへの、精一杯の皮肉を込めた言葉のつもりだつたわ。冷たく笑つたつもりだから、江戸川君がまたどんな呆れた反応を返してくるのかと思つたけど……

「警戒心ならあるに決まつてんだる。けどそいつはおめーが好きなんだつてさ。よかつたな」

予想もしてない言葉を言われたら、ただ目を丸くするしかないのね。

「……何言つてるの？ 好き嫌いなんてこんな子達にあるわけないじゃない。ホラ、現にあなただって充分懐かれてるみたいだし」

ちらりと江戸川君の手元を見たけど、ハーレムみたいに子猫が群がつているじゃない。

「……そう思うか？」  
「え？」

耳に聞こえるか聞こえないかぐらいの声が、私の耳に届く。聞き返すと、江戸川君の腕の中に居た子猫を突然渡されたわ。

「一体何よ」

彼のよくわからない行動に、私はただ手を出してその子を受けとつただけ。何の抵抗もなくやってきた子猫が、やはり無警戒過ぎる気がしてならないけど。私の腕に移動した子があまりに懐っこくす

り寄るものだから。可愛いじゃない？ 思わず抱きしめて頬をすり寄せたわ。

「で、この子が何なの？」

行動の意味も言わずに、私と子猫を交互に見つめてる彼に、少しイラついたわ。だから、ちょっと強めの口調で質問したの。そうしたら、彼はあの余裕たっぷりの不適な笑みを顔いつぱいに貼り付けて……何よ、じれったいわね。

「見てみろよ」

静かに呟いた彼の言葉に首を傾げたけど。彼、今度は突然私の足にまとわりついてた最初の子猫に手を伸ばしたわ。抱き取ろうとして。

「……え？」

「この子、私から離れないわ。江戸川君の手から逃げるよ！」にして

……  
何が起きてるのかなんて、判らない。江戸川君の手が掴くと、にう、なんて小声で声を上げて足をじたばたさせてる。

「ほらな」

「……」

「おまえと離れてたくないんだって。分かるんだよ、お前の側が居心地がいいって」

「うそよ……」

信じられないわ。目の前の現象が、信じられるわけないじゃない。

彼の優しい響きの言葉も、私の胸に染み入つてくるけど。

動物は好きよ。勿論、子猫なんて凄く大好き。懐かれて嬉しくないわけはないわ。でも。

こんな薄汚れた私だけに懐く猫なんて居ていいものなの？ 今だつて、私の薬は彼らによつて、人を殺すために使われているのよ。けど、私だけ何の罰も受けずに安穏と生活してる。

お姉ちゃんみたいな、優しい人でさえ殺されたのに。

まとわりついて来る暖かい猫の体温が、今の私がどれだけ平和な中に居るか教えてくる。こんなまっさらな、何も知らない子が、人間の心も見抜けずに寄つてくるなんて。

「無理して、私と一緒にいてくれなくてもいいのよ」

子猫をじっと俯いて見てたら、無意識だつたけど、そんな科白がつい零れたわ。そうしたら、向かい合つ彼の顔が呆れた表情に変わつて……彼の口から、随分大げさな溜息が零れたわ。

「何言つてんだよ、さつきの反応見ただろ？ そいつはお前と一緒に居たいんだつて」

「……違うわよ、あなたの事よ」

「俺の事？」

しつかり耳に私の声をキヤッチしたみたいで、彼の言葉が少し荒くなつて、彼の眉間にしわが寄つたわ。いつそ聞こえなければいいと思つて、口の中でぼそつと言つた科白なのにね。

聞こえてしまつたら、仕方がないのかしら。

俯いて、言つていいものかどうか一瞬迷つたけど。気がついたら、

口が開いてた。

「あなただつて、被害者じやない。私の薬の」

「あん？」

「全く恨んでないとでも言つの？　あなたの身体を縮めて、そのせいであなたは好きな人にも正体を隠さなきゃいけなくなつたのよ。その身体のせいで、あなたがどれだけ苦労してるかぐらい知つてるつもりよ」

「言ひづら」科白ではあつたけど、案外第一声が出るとせきを切つたように出てくるものね。

江戸川君……あなたは多分、私を恨んだりしてないわ。その位、判つてるつもりだけど。でも、あなたわかつてる？　そもそも私が組織に居なければ、あの薬がこの世に存在する事もなかつたのよ。そうすれば、あなたは今頃元通りの姿で、あの彼女と一緒に……。お姉ちゃんだつて、私を組織から抜けさせたいと思つて手を染めてなければ。

あなたの世界を奪つた私を、最初は理解できなつて怒鳴つたじやない。

「そつ、そもそも私つていう科学者が居なれば。生まれて来なけば、あなた達もお姉ちゃんも、苦しまずに済んで、」

「ふざけんな！」

彼の突然の怒鳴り声に驚いて、続く科白を飲み込んでしまつたわ。さつきと変わって凄く怒つた顔が私を睨みつけてる。

「生まれて来なればなんて言葉言つんじゃねーよ。おめーの母さんが、どんな想いであのテープを残したか、おめーの姉さんがどんな想いでおめーを組織から抜けさせようとしてたか。それがわから

ねーのか？」

最もな事を言われてるのかも知れないけど。少しだけ彼の言葉に  
むつとしたわ。赤の他人のクセについてね。

「それでも私は色んな人を不幸にしてきたのよ。あなただけ、最  
初そう言つていたじゃない！」

私の正体を知つたあなたは、私に一番痛い所を指摘したのよ。考  
えなかつたわけじゃない。毒を作つてゐつもりじゃなくとも、私の  
薬がそう言つ事に利用されてるつて知つてたもの。

「染み付いた罪は、そう簡単に抜けないのよ。あなたがあの時言つ  
たように、私の作った毒で一体どれほどの人が不幸になつたか。考  
えた事がないわけじゃないわ。そう、今ももしかしたらどこかで私  
の薬が、暗殺のために……」

「私、声が震えてるわ。敢えて考えないようにしてゐる事だけど、想  
像するとどれだけ怖いか。工藤君、あなたに想像できるの？ 手を  
汚した事なんてないあなたに。」

工藤君は、口を結んで目を据わらせて私をじっと見つめていた。  
その口からどんな言葉が出てくるのか、最初少し怖かつたけど、も  
う覚悟は出来るわ。いつそ、中途半端に慰められるぐらいなら、  
思い切りののしられた方が……

「確かに、そうだよな」

彼の口から漏れた低い声に、肩が震えた。私はそつと抱いていた  
子猫をおろし、しゃがんだまま彼の言葉の続きを待つたわ。無意識

的に、震えてしまつゝぶしがしつく握り締めて。

「オレだつて、おめーの事知らないうちは、薬を作つた奴が憎かつたよ。こんな身体にさえならなきや、あんなに蘭を泣かせる事もなかつたんだ」

直視するには辛い真実をまっすぐに伝えてくる。でも、これは私の犯した罪の報いなんだから、ちゃんと受け止めないといけない事よ。

私は目を閉じて、小さく深呼吸をしたわ。

「ほら見なさい。やつぱりあなただつて、本音では……」

「最後まで聞けよ。オレはな、そこまで嫌いな奴に必死で尽くして守つてやるほど、お人よしでもねーんだよ。そりや、事情は事情だろーから形だけ匿つても、んな優しくするわけねーだろ。おめーが實際付き合つてみて、いい奴だつて判つてるから一緒に居るんじやねーか

「あら、フオローのつもり?」

敢えて腕を組んで、クールを装つて江戸川君に笑つて見せた。けど、彼は「ちづーよ」なんて首を振る。

「おめーが作つた薬が、他の奴を苦しめたつて事実まで、フオローしてやる気はねえよ。少なくとも、オレはおめーの事嫌いじやねーし、許してやるつもりなんだよ。もしかしたら、おめーのあの薬があつたから、命だけは救われたのかも知れねーつて見方もあるしな。この身体になつて、工藤新一のままじゃ氣づけなかつた大事なモンも、大分判つた氣もするし。そういう意味では感謝もしてんだ。そんなオレがおめーの事、これっぽっちも恨んでるわけねーだろ」

どこか棘のある声だつたけど、一つ一つが私の心に沁みこんでいく。あなたに出会つてから、思い出の一つ一つが私を作つてくれる。あなたに言われた言葉が、今までどれだけ私の勇気に変わつたかしら。意味もなく優しいだけの言葉じゃないから。工藤君、あなたの言葉はいつもいつも……

「私は……」

声が震える。視界が、ぼやけてく。あんまり泣き顔なんて、見られたくないのに。特にあなたの前では、涙なんて流したくないのに。止まらないわ。最初にあなたと会つた時みたいに、止められないで零れてく。

彼がポケットから取り出したハンカチを受け取つて、悔しくて顔をそらした。

「わりい、言い方きつかつたか？」

「違うわ。あなたのクサイ科白に、少し感化されただけよ」

頭をかきながら謝られて、ついツンとした返事を返してしまつ。私も、まだ青いわね。

「あんだよ。素直じやねえ奴」

工藤君が大げさに溜息をついて、また半眼の呆れ口調で呟いた。悪かったわね、素直じやなくて。と返したくなつたけど、たまには、素直になつておくのもいいかしら。

少しだけ間をおいて、涙を拭つて視線をそらしたまま、聞こえるか判らない小声で彼に囁いた。

「ありがとう。私の方こそ、『めんなさい』」

届いたかどうかなんて、彼の顔を見れば一目瞭然よ。大きく目を見開いて、きょとんとした顔で私を見つめてるんだから。それなのに、彼は無言のまま。

聞こえたなら、何か言いなさい工藤君。変に素直な返事したせいで、私からは何も話しだせないじゃない。

氣まずい空氣に、やつぱり素直にならなきや良かった、なんて思つたわ。けど、私と工藤君の間にあつた沈黙を破つたのは、忘れてた予想外の存在よ。

“ミヤア”

突然足にふかふかしたものがすりついてきたの。私も工藤君も驚いてそこを見たわ。居たのは、さつき私に妙に懐いてたあの子。甘えた声で鳴いて、足の下をくぐる可愛い子猫よ。さつき、私たちの激しい口論でいつの間に逃げてたようだけど、戻ってきたのね。思わず抱き上げると、他の子猫達までぞろぞろ寄つて来たわ。

「やだ。ちょっと……何？」

どうしようもなくて、とりあえず母猫の胸元に返すのに、またくつつにできちゃうのよ。別にコントヤつてるわけじゃないわ。私なりに困ってるのよ。そんな気も知らずに、隣で見てた江戸川君は吹き出して笑つてゐるようだけど。

「じゅうがないわね……」

観念したつて小さく溜息をついて見せて、内心では少し幸せを感じてるのよ。あーいを撫でれば「じゅう」の気持ちよさそうな音を出す

し、頭を撫でれば擦り寄つてくるし。私にとってはこの子たちは究極の癒しよ。顔が、ほこんでいくもの。

夕日が、私や子猫達を照らしてゐる。前に太陽の断末魔なんて表現したけど、こんな穏やかな時間も悪くないわ。

「灰原、おめー動物の前では嫌に態度が素直だな」

「あら、悪い?」

上から降つてくる声に、小さく笑つて見せた。

「悪くねーけど、どうせならこつもそんな顔してろよ。前にも言つただろ? そういう顔してれば子供にしか見えねーし、お前の姉さんや両親だって喜んでるだろ? からな」

「……ええ、そうね。あなたの言つとおりかも知れないわ」

こんな他愛もない会話をし、時には言い合ひもして、私たちいつの間にわだかまりを消していつたのよね。そしていつからだつたかしら。あなたの存在が私にとって、誰よりもかけがえのない大切なものになつてたのは。

いつからなんて判らないけど、あなたは一生氣づかないでしょうね。あなたを想う私の気持ちなんて。ねえ、世界一鈍い探偵さん? 一生、私の胸にしまつておく気持ちでいいわ。探偵事務所の彼女にも幸せになつて欲しいから。工藤君の事も彼女の事も、私は大好きだから。ただ彼が、ずっと元気であつてくれる事だけ望んでいるのよ。お姉ちゃんみたいな別れ方だけはもうごめんだから。

だから、彼と一緒に居られるこの一瞬一瞬だけは、せめて私のもので居てくれれば。

「暗くなってきたし……そろそろ帰りましょ」

「ああ、そうだな」

まとわりついてきた子猫達を、今度こそ母猫に帰して、工藤君と一人で立ち上がった。後ろに、子猫達の暖かい視線を感じながら。お姉ちゃんが天国で見てたとしたら、今の私たちをじつ悪つかしい。

“ // ヤア……”

私の気持ちに応えるように、小さな鳴き声が最後に耳に届いた気がする。気のせいだと諭うけどね。

『見守つてゐるから、ビタバタと、幸せでいてね』



(後書き)

「んにちは……ってか、何を血迷つた私！」（滝汗）

朧月の、（多分）お初小説。

恥ずかしい、恥ずかしいよ恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしいつ／＼  
＼＼＼

とりあえず、こんなお話を最後まで読んでトヒツてありがとヒビジを  
います／＼＼＼

言い訳、させて下さい（涙）お願いつ。

そもそも、完全にお蔵入り状態だったコレを、わざわざ加筆修正ま  
でして出でたと思ったのは、あまりにお待たせしてしまつてる懺悔  
からで。

私には珍しい、一話完結ストーリーで、私には珍しい、コナンが無  
事なまま終わる話で。

なので、本人的には意外と気に入つてる部類でもあります（^\_\_^；  
てか、一コマつて言つ割には長げーぞこの話…

最初に書いた小説の記憶つて曖昧なんです私。同時期にどうとたく  
さん書いたから。

でも、コレが多分最も古いお話だと思つ。私の記憶の中で、最有力  
候補です。

その為、哀ちゃんのキャラも古かつたりする（^\_\_^；  
でも、古い事を考えたとしても、こんなに後ろ向きでもない気がす  
るけどね、哀ちゃん。

ストーリーや台詞回しだけ当時のまま、文章は大幅に改稿しました。  
(あ、でも台詞は時代を意識してちょっと変えたかな。お母さんの  
テーブとか)

大幅に改稿したとはいえ、コレだけ古い小説に手を加えるのは結構難しかつたのよ。当時の自分の意図がわからず。まさかの一人称に戸惑つたよ。やっぱり、あんまり得意じやない。一人称。ストーリー的に、相当未熟ですよね。めんね。

このお話は、コナンを思つ哀ちゃんの気持ちを全面に出したかったと言つか。哀ちゃんの片思にものつて昔から大好きなんです。哀ちゃん自体が大好きだからね。切なくて、きゅーんと来るような……え？ 私の話じやこなつて？ 悪かつたなつ（／＼。）ビーン

そして、哀ちゃんに纏わりついてた子猫。ちょっとぴり裏設定を狙つたのですが、私の考えにどれだけ気づいてくれた方が居るかどうか。最後のビンから聞こえたんだか判らない科白も。

あああ、もうホント恥さらし／＼反応が恐ろしいです。で、でも、五年以上前（多分）に書いた小説の『し』の字も知らなかつたうつけ者のやらかした事だと思つて、今回ばかりはコメントお柔らかにお願いしたいです。言いたい事は色々あるかも知れませんが。

反応怖い／＼びくしてる私に免じて。願わくば、心温まるストーリーであつたなら幸いです。

それでは、臍丸の恥さらし的な原点をお読み下さつて、ビンもありがとうございました。

こんなお話ですが、少しでもお楽しみいただけましたでしょうか？

また是非、他の作品でもお会いできたら幸いです。

あああ、ドキドキドキ／＼私のお話好きですか言つて下さつて

へへ

る方が、幻滅だーとか思つたらどうしようか（恥）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6430e/>

---

子猫の導くままに

2010年10月8日23時48分発行